

# 読 者 の 広 場

満 田 邦 彦

北海道出張を利用して夕張に行ってきた。二十三年ぶりの里帰りである。

夕張はメロンや炭坑の町として有名である。しかし炭坑の火が消えた今、そのぶん夏はイベント、冬はスキー客を呼び何とか食い繋いでいるが、町の人口は減っていく一方である。丁度私が訪れたときもラリー競争の真最中であって、遠くは横浜ナンバーや愛媛ナンバーなどの色彩も鮮やかなラリー車が、その華やかさとはほとんど無縁と言えるような寂れた夕張の町の中を、所狭しと走り回っていた。

ところで、夕張本町から更に30キロメートル程山奥に入ったところに、人口が五百人に満たない小さな村がある。私の育った大夕張である。

大夕張は、東の山と西の山に挟まれた谷間の小盆地で形成されている。

東は、標高1668メートルの夕張岳を抱えた夕張山地と、その麓を美しい夕張川が流れている。西は、神社のある小山と、スキー場跡の緩やかな傾斜が続いている。

大夕張つまり大きな夕張とは、二、三十年前までは確かに事実であった。炭坑の最盛期には、人口二万人を越えていたこともある。今では年金暮らしのお年寄りと営林関係者とその家族、それにわずかに点在する店舗関係者等で構成されるこの村のどこにも、その頃の面影はない。一時は生徒数が千五百名近くいた小学校も、今は二三十名足らずに減ってしまった。グラウンドには横倒しになった鉄棒と、赤く錆付いて、鎖の切れかかったブランコが無造作に置かれており、昔良く遊んだ神社の境内にしても今は参拝に訪れる人もいないのか、背丈ほどもある雑草の中に朽ち果てて今にも崩れそうな神社の屋根を人恋しそうに覗かせていた。私の育った家は、すでに荒涼とした野原と化していた。閉山と同時に空き家となった家は、市の方で次々と取り壊していった。家をそのまま残しておいてくれても良さそうなものだが、野犬が住み着いたり、崩壊の危険のことも考えての判断だろう。

しかし、自然の生命力には目を見張るものがある。確かに二十三年ぶりの大夕張は、私にとって余りにも哀れな姿を見せていた。しかし人間が去った後の古里は、自然が生き生きとしていた。廃坑跡の野原を歩いていると、どこから来たのか北キツネが現われた。以前は見かけたこともなかったのに、人間が居なくなったので山から降りてきたらしい。昔、粘土質のオレンジ色の地肌を見せていたスキー場も緑が生い茂り、石炭を洗うため、真黒になっていた夕張川は、エメラルド色を取り戻していた。炭坑の象徴であるボタ山は青々とし、石炭が燃えたときに出る煤煙で真黒だった空も、澄み渡った青空と変わっていた。緑の少ない東京から来た私にとっては、まさに、大自然そのものである。この生

まれ変わった大自然の中に、環境問題は存在しない。そもそも環境問題とは、環境が人間に問題を起すのではなく、人間が自然環境に問題を生じさせていることである。

そういえば、私の古くからの友人に、年間数十万円で生活している人がいる。仕事に付けないでいるのではない。わざとそういった生活をしているのである。

彼が言うには、環境破壊の最大の原因は消費社会（特にリサイクルのきかないエネルギーの消費）にあるという。市場経済を発展させようとするエネルギーの消費自体が、人間が住めない環境にしてしまっている。この消費を最小限に押さえていくと、年間数十万円ですむという。このような生活を何年も続けているわけだが、他人が思っているほど困難な生活ではないとのこと。しかも、労働力を売るといった消費を最小限に押しとどめた生活は、その自分分の労働と時間を惜しみ無く使うことができて、非常に充実しているとのこと。羨ましいかぎりだ。

幼少の頃よく遊んだ神社の境内に行ってみた。自分がどの辺にいるのかわからないほど深い笹藪だ。時折見え隠れする社の屋根を目指してどんどん突進んでいった。と、突然、何か黒い影が動く気配を感じてゾットする。クマかも知れないと思った瞬間、金縛りにかかったように、身が凍り付いた。クマは、昔一度だけ見たことがある。友人と沢で魚補りをしていたとき、対岸の松林の崖を一頭のクマがゆっくり登っていた。その時もからだか思うように動けなかった。

黒い影が唸り声を上げながら、どんどん近づいてくる。突如、目の前の笹藪が真二つに割れて、坊さんが姿を現わした。

余程、私の驚いた顔が間抜けだったに違いない。私の顔を見るなり、いきなり笑いだした。いいかげんに笑った後、何を言っているのかわからない私を無視して、社に向かってお経を唱え始めた。えらくドスの利いた声である。どうりで先程、クマの唸り声と間違えるはずだ。しかし、坊主にしては、偉く体格がいい。訊くと、二十年位前まで、ここで坑夫をしていたのが、閉山後、札幌で仏門の道に転職したのだそうだ。

この坊さんの話が面白い。夕張の石炭の話から、エネルギーの話になった。

「人間は、エネルギーを大量に消費することで、生活環境の快適さを求めるが、それを望めば望むほど、環境を悪化させていることになかなか気が付かないでいた。化石エネルギーを無神経に乱用した結果、地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、海洋汚染、熱帯林消失、などの環境破壊が生じてしまった。我々が、今後存続していくためには、この地球と呼ばれる“閉ざされた系”を一つの有機体として、意識的に尊重していくしかない。つまり、我々が生き続け、他の生物も生き続けるには、自然との調和を計り、他の生態系と強調していきっていくとする意志の有無にかかっている。もし、人間がこの意志を持ちつつ、自然の循環プロセスに従うエネルギーを使用するならば、種の存続は保たれるのではないだろうか。」イギリスの生物学者ラブロックが唱えた「ガイア論」である。

私は、またいい人に巡り合えたという満足感と、こういう人が一人でも多く存在する限り、地球の

未来は明るいのではないかという期待感とともに、夕張の町を後にすることができた。